

支援が必要な児童・幼児にリズム感と 体操を教えることの必要性

大 橋 美穂子

The need for teaching gymnastics and sense of rhythm in infants

Mihoko Ohashi

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

支援が必要な児童・幼児にリズム感と 体操を教えることの必要性

The need for teaching gymnastics and sense of rhythm in
infants

大橋 美穂子
Mihoko Ohashi

はじめに

子供は、動きたい、楽しく運動したいという気持ちを持っている。幼児期はこれから生活を元気に過ごしていくためにとても大切な時期であり、感覚運動や運動機能を開発する第一歩となる。そのために音楽のリズムにのって、生後1年くらいから生まれる模倣運動の芽生えを刺激することによって、子供の感覚の発達を顕著にしていくことができる。

家庭と違った環境の中の前向きな体づくり、仲間づくりも、音楽、リズム運動を通して、更にのばしていけると考える。

すでに、明治から戦前までに幼稚園では唱歌教育が始まっている。

日本の音楽教育の基礎を築いたといわれる伊澤修二は、明治7年から8年にかけて唱歌遊戯の実践を行っている。唱歌は精神に娯楽を与え、運動は身体を爽快にする。そのため、同時にこれを行うことが教育的にもよいものとした。

大正期から昭和期の流れを経て戦後になっていく。昭和23年の幼稚園教育の中に楽しい幼児の経験として、リズム・音楽を示している。「保育要領 幼児教育の手引き」のリズムの項目の目的としては「幼稚園のリズムの目的は、幼児のひとりひとり、及び共同の音楽的な感情やリズム感を満足させ、子供の考えていることを身体の運動に表させ、いきいきと生活を楽しませることにある」と定められている。

平成元年には、25年ぶりに「幼稚園教育要領」が改訂された。この中での、表現については、

豊かな感性を育て、感じたこと考えたことを表現する意欲を養い、創造性を豊かにする観点から示すとある。目で見たと、耳で聞いたことを感じ考え、自分で表現していく。

イメージを膨らませていく。表現の喜びを味わい、味わわせていく内容を私たち教育者も考えていくことが必要で大切なことと考える。

1. 広汎性発達障害 ことばの障害について

私の体操教室に広汎性発達障害のことばの障害の児童がいる。この児童は、言語理解がやや弱い。一方的な会話がが多く、独り言、反響言語が多い。かなり理解が低いことはないが状況についての理解が困難である。話しの内容理解が困難であるから自分の考えの全てを表現できていない。ただし、イメージネーションからの障害で先を予測するのは苦手であるが、言語の理解に比べ、視覚情報の理解・処理は得意である。絵・ビデオ・テレビなどから、言葉を省かずゆっくり伝える。これらを、視覚的な手がかりとし、現在の状況を何度も説明し、円滑に行動し、自分を表現できるようにしていく。

東京都医学総合研究所では、一般的アプローチとして感覚運動の総合訓練が示されている。

・屈伸・マット運動・マラソン・視覚と上肢の協調運動（ボール投げ）リズム運動を行う。

総合保育・健全児との交流、家族の同席、複数の指導者、少人数保育

これは、一部であるが体操教室のプログラムにも含まれている。後に述べる。

2. 子供の成長と発達環境について

「遊び」や「スポーツ」、「体育」をとおした積極的な体力づくりや仲間づくりは、こども達の健全育成に大きく貢献してきた。幼児期から様々な遊びをとおして体を動かすことを覚える。(豊岡短期大学 こどもと体育Ⅰ 長谷川 定宣先生著 巻頭)

子供は胎児期の7～8月頃から聴覚が発達し始める。母親の心拍音、血流音、声、対話がはじめて聞く音である。この頃から、手足をうごかし心の動きを感じる発達となる。この刺激～反応となる。

乳児は、「ことばかけ」、「スキンシップ」など周りの人、環境から運動本能を刺激される先にも述べたが、これが模倣運動・探求本能・の芽生えである。この芽生えによって子供の運動・感覚の発達が顕著となる。

運動発達の段階と年齢の区分 (豊岡短期大学 こどもと体育Ⅰ 長谷川 定宣 18)

胎児～4ヶ月・4ヶ月～1歳 反射運動の段階 リズムを感じる時代

誕生～1歳・1～2歳・2～3歳 初歩的運動の段階 テレビ等で体を動かす

2～3歳4～5歳6～7歳 基本的運動の段階 自分の生活範囲を広め、模倣の習慣化

7～10歳・11～13歳・14歳以上 スポーツに関連する運動の段階、興味を広げる

幼児期に獲得する基本動作と運動は、生涯を通じて運動全般の基本となる。

私の生徒は7歳だが幼児期から見ている。現在の様子をこの発達段階を考えながら述べ

ていく。

3. 児童の現状

言葉の面で意志を伝えたり、伝えられたりすることが苦手である。言葉の裏にある感情が読み取りにくい。独り言が多い。仲間と、一緒にいてもそうである。繰り返し同じことを言ったり、伝えたりする。音楽にあわせて仲間と踊る時には大声で歌っている。リズム感はあるが、勝手に速く先行してしまうことが多い。

コミュニケーションはとれるので、健常の仲間との連携はとれる。ただし、いつもと違う位置になったり、ペアが変わったときなどの理解がしにくいので説明をじっくりしないと泣いたりする状況となる。

先に述べた、一般的アプローチをしながら改善を目指す。

4. 改善のための方法

体操教室のプログラムの一部を下記に示す。

生後1年くらいからの模倣運動の芽生えを刺激することで、感覚の発達を顕著にしていきたい。

マットと跳び箱運動・・・前転後転などを取り入れていく。

ボール	・・・腕などでの転がし、つき、リズムに合わせたステップ、ターン
リボン	・・・らせんなどの回し、リズムにあわせてリボンを使いながら踊る
フープ	・・・回し、跳ぶ、転がし、音を出すなど工夫したフープの動き
バトン	・・・8の字回し・水平回し
ダンス	・・・リズムダンス・・・音楽に合わせる（拍子、雰囲気）
他、縄跳び	（大橋体操教室 パンフレットより 1999～）

東京医学研究所の広汎性発達障害の感覚運動の総合訓練の一般的アプローチをみると、共通点が多い。また、健常者と一緒に動き、本人の母・姉とも同じ時間にみてもらえている。指導者も2人でおこなっている。これも、研究所の総合保育にあっている。

この繰り返しの動きを毎週3回行っている。改善されているところ、更なる改善点は次に述べる。

4. 改善されているところ、更なる改善点

約3年の教室での練習の成果

リズム感、音取りがかなりできるようになった。音楽を聞きながらの踊りはリズムを正確にとれる。母親が毎週休ませず継続がきちんとできていることも、児童の環境の良さである。友達と組んでの動きも、下級生を見てあげることも優しい心でできる。心も成長している。

運動能力の面も逆上がり、後ろ回り、縄跳びを幼児時代から回数を重ねて行ってきた。

そのため、時間はかかったが健常の仲間との差がなくできるようになった。

リズム運動に関しては、大勢の観客の前での発表も堂々と楽しくできている。

更なる改善点は、具体的にはミニトランポリンがよいとされているので取り入れたい。年齢が上がっていくと、コミュニケーション等意志の通じ方が難しくなってくると思われる。

時間をかけてじっくりと向き合っていきたいと思う。

まとめ

支援が必要な幼児・児童にリズム感と体操を教える必要性について考えてきた。

明治の時代からの、音楽つまりリズム感、運動の大切さが考えられてきたこと。昭和・平成と楽しい経験からの音楽と運動の必要性を、教育内容の中にもりこまれてきたこと。

発達障害の改善のアプローチも運動リズムが入っていること。子供の発達の段階でこれらを体験、経験することが組み込まれていること。

リズム感・運動は子供の心と体の発達段階で重要であることが、改めてわかった。

豊岡短期大学の健康科学では、幼児の手足の運動能力の発達と、精神発達とは切り離せないもののべられている。更に、この幼児・児童が大人になってもこれらは重要である。

長い人生の中で、現代の体育の位置と役割があるとも述べられている。

スキヤモンの発育曲線の中でも、神経型は8歳までに90パーセントの成長と去れ、幼児・児童の時代に吸収できることの大切さが分かる。

心で感じたことを、体で表現し、自分だけでなく家族友達との関わりも深まり、豊かな心と、生活になっていく。健常者には、当たり前でできそうなことも支援が必要な幼児・児童にもじっくりと向かい合い、時間をかけること。教育者が、先の見通しを持ったプログラムをたててあげること。今回の論文で深く考えさせられた。

参考文献

1. [音楽表現]の理論と実際 8～30 株式会社 音楽の友社 1997
2. 身近な医学研究情報 公益財団法人 東京都医学総合研究所

- | | | |
|-------------|-------|------------------------|
| 身近な医学研究情報一覧 | 脳発達障害 | 2. 脳発達障害での知能障害 |
| 3. こどもと体育 I | 長谷川定宣 | 巻頭・18 豊岡短期大学通信教育部 平成29 |
| 4. 健康科学 | 長谷川定宣 | 2～3 豊岡短期大学通信教育部 平成28 |

